



「リードオルガンと賛美」

常務理事 石倉 智史

るうてるホームの礼拝室（多目的ルーム）には、リードオルガンとチップendale様式（猫足）のアップライトピアノがあります。どちらも1970年代前半の製品ですから、50年近くホームにあることとなります。全面移転の時も、大事に大事に搬入したことを今も覚えています。

たぶん誰もがリードオルガンの音には親しんだ記憶があるのではないかと思います。少し目を閉じてそれぞれの子供の頃の頃を思い出してみたいかたがたでしょうか。学校や幼稚園の先生が、また皆さんの友達が、教会で育った方々は礼拝の時の奏楽が、懐かしくもやさしい笑顔とともにリードオルガンの音が蘇ってきませんか。

リードオルガンといえば、幼稚園や小学校を思い出す人も多いかもしれませんが、私の場合は教会です。もともと日本に最初に入ったリードオルガンは宣教師が持ち込んだと言われていますから、今のように電子楽器が主流になるまでは礼拝の奏楽といえばリードオルガンが主役でした。

リードオルガンは足でペダルを踏んで空気を送り、鍵盤を押して音が出る仕組みになっているので、奏楽者の呼吸をそのまま音の表現に表すことができます。また同時に会衆の息継ぎをも巻き込みながら、礼拝堂全体が賛美で一体感に包まれる様は鳥肌が立つ時さえあったことを今でも覚えています。

その繊細でかつ柔らかい音色はとても讚

美歌にあっていて、しっとりと落ち着いた曲はもとより、テンポのある強弱のはっきりした曲でも奏楽者の気持ちが会衆に伝わってきます。

奏楽者の気持ちが伝わるといえば、古いうてるホームの「作業室」では、何人かの奏楽者がよく練習をされていました。私の部屋がすぐ近くにあったこともあり、「あっ今朝は〇〇さんが演奏しているな」「今は△△さんだな」と演奏する人が想像できるくらい、同じ楽器を演奏していてもその音色の違いを聴き分けることができるのもリードオルガンならではの気がします。たぶん奏楽者一人ひとりの感情やその時の気分なども、一つひとつの音に表れるのでしょうか。私は、そこまで聴き分けることはできませんが、弾いている人には自分の弾いた音に満足する時もあれば、そうでないときもあるのかも知れません。

「主に従う人よ、主によって喜び歌え。主を賛美することは正しい人にふさわしい。琴を奏でて主に感謝をささげ十弦の琴を奏でてほめ歌をうたえ。新しい歌を主に向かってうたい、美しい調べと共に喜びの叫びをあげよ。」（詩編33編1～3）

生楽器のもつ魅力は、聖書の時代から多くの民衆を虜にしてきました。こうした生楽器は、古き良き時代のものではなく、今も新鮮に音を紡いでいくことができます。

生楽器は、手をかければかけるほど、その

魅力は増していきます。また最近の電子楽器のように部品の劣化で使えなくなるということがほとんどなく、半永久的に使用できます。うるてるホームのリードオルガンとピア

ノは、たぶんこの先もずっと、多くの方々に愛され弾かれていくことだと信じています。



「河内キリシタンの喜びと悲しみ」-2-

(前号つづき)

1563年に驚くべき、73名の集団洗礼があって、キリシタンとなった結城アンタンは、岡山城の近くに教会堂を建てました。飯盛城で受洗した武士たちは、ここに集まり、神について話したり、聞いたり、祈ったりしました。その後、財産を狙う物があって、アンタンは32才の若さで毒殺されました。その息子のジョアンは、八尾城主の娘マルタを妻に迎え、先の教会が手狭になっていたのも、後見人の叔父の結城弥平次と共に、河内でもっとも美しい教会堂を岡山の砂に建て、城下では一人の異教徒もいない程に栄えさせました。このように多くの城主は、息子、娘が結婚することにより強く結束しました。

また、亡くなった結城アンタンの葬儀は、京都において、宣教師たちが死と追放の危機の中で、日本で初めての盛大なキリスト教葬儀を公然と行いました。ビレラ宣教師が恐れることなく神様への栄光と熱心な信仰心を人々に証するためでした。一万人を超える人々が集まり、ダミアン修道士が死について、および人間が神に対してなさねばならない責務について説教しました。キリシタンでない人々も感動したということです。

集団洗礼を受けた73名のうち、最も代表的な人物、三箇(さんが)頼照(サンチョ)は、飯盛山城の眼下、深野大池(ふこのおおいけ)の中の島に、聖堂をつくり、礼拝を守り、妻子領民も導きました。特に、クリスマス

ケアハウスうるてる 中山和子

とイースターを盛大に行いました。多くの宣教師も日本語で子供たちに教えたり、賛美をしたり、各地から集まった200名のキリシタンたちをもてなし、60隻の飾り立てた舟が深野大池に浮かび、200隻の漁師の舟が3千名の見物人を乗せて、共に祝い、このパレードは15年間続きました。

今も5月の初めに「野崎まいり」として残っていますが、これはイースターのカムフラージュで処刑された人を偲び、古き良き時代を懐かしんでなされていたようです。

三好長慶はこの当時、最も力のある武将でした。宣教師に対しても特別な好意を示し、布教許可の便宜を図り、布教の妨げを禁じて寛大でしたが、1564年、42才で、飯盛城で病死しました。同じように宣教師に対して寛大であった織田信長が、本能寺の変でなくなり、徳川家康の時代になると、封建体制を確立しようとする幕府は、近世の芽生えを厳しく排除しました。

1614年「キリシタン大名追放令」が出て、高山右近や宣教師やディオゴほか148名が、マニラやマカオに国外追放になりました。しかし高山右近の信仰に強い影響を受けていた高槻や摂津地方のキリシタンたちは、大正時代まで山奥にかくれて潜伏していました。

このころ、ローマ時代のキリスト教迫害に匹敵する大迫害が日本で行われ、世界のキリスト教会を震撼とさせたということです。2~30万人のキリシタンが殉教の死を遂げました。キリシタンを見つけ出すた

めに「踏み絵」や、「五人組制度」等が行われ、人々は知恵を出して、表面上は仏教徒であるように、何を言われても言い逃れが出来るように工夫して、実際には、キリシタンの信仰を持ち続けていました。

殉教者となっても十字架にかけられ、復活されたイエス様を胸に、火炎の中でも讃美歌を歌い、周りの人々を励まして、死んでいったのです。このような大きな歴史あ

る所に、私たちの「るうてるホーム」はあるのです。私たちは毎朝「聖書日課」をもとに、祈りの時を持っています(その日に掲げられている教会の皆様のことをお祈りしています)。また、毎週日曜日には礼拝があり、1人でも多くの方が救われるように祈っています。(おわり)

「支えられつつ、支える責任と喜び、そして、感謝!」

変わることなくご支援を頂き、ありがとうございます。

社会福祉法人「るうてるホーム」の誕生日は、1965年(昭和40年)5月28日ですから、52歳を迎えようとしています。設立準備期間を含めて、長い歩みを導き、お支え下さっている主なる神と、日々の働きを担って下さっている歴代の職員、評議員、理事の方々、並びに、関係自治体の担当者に、心から感謝を申し上げる者です。そして今、「るうてるホーム」の働きを、背後から、土台のようにご支援下さっている後援会の皆様に、感謝と共にお礼を申し上げる機会を与えていただきました。

52年の内、僅か8年なのですが、理事長の職責を担当させていただきました。

2000年(平成12年)に就任しましたが、高齢者への対応が、制度としても大きく変換した年度に当たります。それまでの社会福祉制度から、介護保険制度へと変わりました。同時に、高齢者への支援や介護に、必要度ランク(段階)が取り入れられました。また、事業主体も社会福祉法人

西宮教会牧師 市原正幸(元理事長)に限定されていた従来からの枠が取り除かれて、一般企業なども参入が可能になりました。理事会も、施設長を初め職員も、大きな危機意識を持って運営する事が求められました。度々の職員研修会を実施し、従来からの措置費での運営から、介護事業への意識改革が求められたのです。時には、外部からのコンサルタントをお迎えして研修を重ねながら、制度変更に対処できて、新築移転の現在があります。

それらの期間も、それ以前もそれ以後も「後援会」の皆様からのご支援は、心強い励ましと安心を与えてくださっています。丁寧なお礼状を、お一人お一人差し上げてくださっていた、当時の後援会会長には、敬服いたしておりました。後継の職責を担われている後援会会長の許、施設、職員、後援会が一丸となって、益々、力強い「るうてるホーム」となって、その使命を担って下さることを願い、主なる神の変わることのない見守りと導きをお祈り申し上げます。 平安在

